

合作の思想覚え書

——労働キャンプ運動の方法——

矢 部 頭

第一章 「しゃべる」と「つるはし」

労働キャンプ運動は、その核として「しゃべる」と「つるはし」に象徴されるように、肉体労働を不可欠なものとする。この肉体労働を中心とする運動形態による具体的な△モノVの建設ということ抜きにして労働キャンプ運動を語ることは出来ない。

この肉体労働が向けられる対象は多くの場合、災害復旧、各種施設修理建設、地域公共施設修理、開拓地支援などで、地域共同社会に於て最も必要とする施設、機関、事業に向けられるのが原則とされてきている。

「労働キャンプは比較的矛盾の多いと思われる資本制下における擬似共同体へ出かけていって、その生活人と協力し、我々の肉体的精神的労働力を提供することにより、その生活共同体のよりよき発展を促進しようとするものである」（『しゃべる』復刊第一号）というように定義づけられてきた。すなわち、一日（週末キャンプ）あるいは、一週間から二週間（ロングキャンプ）にわたって、対象となる現場に入り込み、そこでキャンプ（共生

活）をもつことによって肉体労働による建設を進めていくものである。

労働キャンプ運動は、元来政治が落ちこぼれてきたと思われるような社会的矛盾の凝集点、あるいは底辺と呼ばれる部分に接点をあて、問題の解決を図ろうとするが故に、現象的また機能的には行政の補完物となってきた場合が多い。労働キャンプ運動は、元来行政がやるべき仕事を、行政がやらないという根拠でもって進められてきたのであるならば、それは行政機関の下部機能的役割を果たしてきたということにすぎない。労働キャンプ運動が目指すものはそのようなものであつたのだろうか。労働キャンプ運動のもつその形態ゆえに、行政の補完的役割という位置にとどめることなく、労働キャンプ誕生の初心であるところの「集団のエネルギーを戦争という破壊ではなく平和の建設へ」というクエーカーの平和主義を受け継ぎ実践していくためには、どの部分で行政の欠けているところを補い、どの部分で行政を拒否するかという点を明確にしつつ運動形態を考えていくことを怠るならば、簡単に体制運動となる危険性が強い。つまり、肉体労働はそれ自

身「労働奉仕」的に見られ、誰れからも拒否されないかわりに、運動の主体によつては行政への「労働奉仕」としてしか存在し得ないという性質を多く含んでいる。

労働の対象が現象的には行政の貧困からくるものに向けられてきたことは、労働キャンプ運動を考える場合最も重要な事柄であるが、逆の側面から見れば、行政の補完物でしかないという位置に運動を限定させる結果になりかねないわけである。この弱点を運動の利点と転化しうる要素として運動論を展開しうるならば、行政への労働奉仕運動に陥ることなく平和運動として特異な労働キャンプ運動を位置づけることが出来るといふのがこの小論のテーマである。仮設としてのそれは、労働の産物は機能的に行政の欠除した部分を受けもち、いわば体制の部分として動くかもしれないが、それを作りあげた思想的内実は産物よりもひとまわりもふたまわりも大きなものとして、体制を超え未来を透視し、またこれによつて部分として動くものは単に行政の政策的なものとして動くのではなく、現実にも内実の豊さでもって具体的に勝ちとつていくとする。この視点から、アメーバの如く体制の破目に浸透していく平和的労働キャンプとして、LBFとFIWO関西委員会の二つを取り上げ、その運動の歴史（第二章）と思想の系譜（第三章）を辿り、それを支えてきた根拠をみる（第四章）ことによつて、合作の思想（第五章）を考えていきたい。

第二章 労働キャンプの建設してきたもの

(1) 労働キャンプの輸入

労働キャンプ運動は、人間の集団的エネルギーを戦争という破壊力ではなく、平和の建設にむけるものとして第一次大戦後生まれた。一九一九年、オランダで開かれた国際友和会は、「以前の敵との和解の動機は、いかなる物質的利益も考えない奉仕の精神のみに基づく一般的な仕事によつて最もよく助長される」と決議したとき、その席にあつたスイスのクエーカー教徒、ビエール・セレゾールはそれを具体化するものとして国際労働キャンプを提案した。

一九二〇年、大戦中最大の激戦地で廃墟と化したフランス、ベルダン地方の復興再建に協力する青年ボランティアの国際集団が現われた。つい最近まで敵国同志であつた仏、独、英、米、オーストリア、スイス、オランダ、ハンガリー等から集まつた青年は、五ヶ月間寝食を共にし、家屋の建築、道路工事、整地、植林等の建設作業に従事した。これが世界初の労働キャンプである。

第二次大戦後の日本での労働キャンプ運動は一九四九年から始まる。この年には、米国友会徒シェモアが個人の責任で、原爆への謝罪の意をもつて、「広島の家」建設キャンプを提唱実行しているし、組織的な国際基督教労働キャンプが、日本基督教協議会青年部の中にある国際基督教ワークキャンプ委員会によつて開始

されている。また米国友会奉仕団（AFSC）が日本での平和活動部門の一つとして労働キャンプをこの年採用し、引揚者隣保事業「ネイバフッドセンター」を創設し、労働キャンプを行った。AFSC内部の機関としてボランティアによる労働キャンプ委員会が組織されたのは一九五一年であり、ビエール、セレゾールの創設した労働キャンプ（SCIC Service Civil International）が日本に紹介されたのが一九五〇年である。

この頃の労働キャンプはどのような活動をしていただろうか。長文の引用になるが、日本基督教協議会の労働キャンプの概況から見てみよう。

一九四九年

一、函館——函館市の五稜廓の近くにある、樺太からの引揚者のバラック部落の為の道路と児童の為の道路児童遊園を造り、運動具を寄附し、汚水の排水溝堀りを行う外、引揚者を卓頭に迎えたり、旧兵舎の臨時収容所に奉仕した。

二、五日市——東京の西、五日市町に新設される日本基督教団青年の家のため、山陵を崩して平地を作り、約六〇坪の建物二棟の為め土台を仕上げた。

三、諫早——長崎県諫早市の鎮西学院に宿泊して、同学院の運動場造り、郊外の山を崩し谷を埋めて造る市民運動場の建設に奉仕した外、市外の小野にある引揚者部落のための児童遊園地を造る

ため、水田を埋め、運動具を附設した。

一九五〇年

一、千葉——千葉県成田の近くにある富里村の双場農場のため、農事の手伝い、家畜小屋建設、道路造りを行った。この農場は東京出身の満州よりの引揚者たちが共同して経営する共同農場である。

二、大阪——大阪市南部にあるスラム街に、診療と刑余者保護事業を行う為の大阪基督教社会館のため、爆撃地跡の敷地を整備し、ボータブル、ハウス二棟を完成した。その他、附近住民の為の児童保育とレクリエーションを行った。

三、松江——松江市の城跡にあるユネスコ会館修理工事の手伝い、同公園の道路造り、市内数ヶ所の防火用井の建設に奉仕した。

一九五一年

一、盛岡——郊外の旧兵営跡には引揚者が居住、その防火、衛生の設備が非常に悪いので、防火用井の改修、排水溝の新設と清掃、共同集会所の修理を行い、また数キロはなれた所からトラックで砂利を毎日毎日数回運搬して道路を改修した。

二、金沢——ここも兵営に引揚者が一杯つまっていて、その子供らの遊ぶ場所もないので、荒廃した旧練兵場を清掃、土盛りなどをして運動場に造りかえた。

三、東京——郊外の稲田登戸の丘の上に、日本学生奉仕団の計画する学生サナトリウム建設のため奉仕した。仕事はトロッコを使

用して、山上に土を切り取り平地を造ることであった。

四、名古屋——名古屋東方猿投村の農村幼稚園のため、運動場と通路を造った。

五、熊本——神水にあるルーテル教会社会事業の建物と神水教会建築のための敷地整備、菊池にある国立療養所の中の拡張された敷地に花壇園をつくり、又、所内に新設される基督教礼拝堂のための土地整備を行った。なお余暇には、患者の精神的方面にも奉仕した。

一九五二年

一、北海道——洞爺湖畔に教会と修養所を建てるための整地整備と道路造りをした外、小学校の運動場拡張を行い、余暇には療養所の慰問をつづけた。

二、東京——昨年に引き続いて登戸を訪れ、学生サナトリウム建設を更に拡大完成した。

三、尼崎——市当局の招請によって、市の北辺の大竹藪を切り開いた児童遊園地を造った。

四、四国——松山市郊外、横河原村にある国立療養所内に、防火用水の為の大プールを完成し、更に南にあたる川上村に移り、小学校と中学校の排水溝掘り、及び防火用水拓を造った。

五、小倉——市営の総合大運動場の施設の一つである野球場の観覧席約五〇米をセメントで造った。余暇には失対の日雇労働者の人々と交換を行った。

一九五三年

一、美唄——美唄炭坑地区に新に建設される美唄教会と炭坑センターのための敷地整備と土台を築き上げた。

二、別府——市立の小学校の水泳プール建設と基督教孤児院の運動場を造った。

三、鹿児島——旧飛行場跡の細民街のため、衛生施設と約百米の排水溝をコンクリートで仕上げた。

一九五四年

一、佐渡——佐和田町にある佐渡教会の新会堂のため、コンクリートの土台をつくった。

二、網代——伊豆半島の漁村網代に虚弱児童の養護施設を建設するため、海辺の山の上の土地を地ならしして約三百坪の平地を作った。

三、広島——市の北方牛田の山腹に、全広島教会のため基督教公園墓地を建設する為の労働をした。階段式の土地の草刈、整備、山奥からの材木伐採と運搬、それを用いて頂上には白木の大きな十字架が建てられた。この墓地に最初に埋葬されたのは、広島刑務所内で信仰に入って、処刑された引取人のない、二人の死刑囚の遺骨であった。毛色を異にするキャンパーたちの聖歌と祈りのうちにその遺骨はここに埋められた。(日本ユネスコ国内委員会事務局作成『ワークキャンプハンドブック』より引用)

A F S C の労働キャンプ部門は、一九五三、五四年度の伊豆、伊勢湾台風の救援キャンプをもち、その参加者の中から関西のグループが結成され、のちの F I W C の委員会となる。京阪神の施設めぐりキャンプがそれから日常的に行われていつているが、その中から中心的な長期キャンプの流れを見ていくと、一九五七年、吹田市の「在日朝鮮人」地区で日朝友好託児所建設にかかわり始め、翌年夏には国際キャンプがここで持たれ、この地域の排水溝の整備等を行った。一九五九年夏の国際キャンプは大阪市の部落で行われ、この国際キャンプ落選者のために作られてきた所謂「日本語」キャンプが F I W C の土着化と自立化の為の特別な意味をもった。それまでは試験あるいは選考によってキャンプ参加者は人数的に制限されていたことがあったからである。一九六〇年の宝塚に於ける女子身体障害者授産施設「希望の家」建設キャンプは、そのような「小集団理論」から抜け出し、あらゆるボランティアを無制限に受け入れる方法を取り、ここに百人以上の動員をもつキャンプが出現した。そして、土地、資材、設計、建築、とすべてにわたって協力し、主体となって新しい施設を作り上げた。

翌六一年に A F S C の労働キャンプとしての F I W C は、日常活動のサークルとして分離独立。この年 S C I 日本運営委員会（現日本本部）結成さる。金沢でこの年身体障害者施設「優身の会（ゆみみの会）」の家建設。また吹田市スラム住民の自主団体「仰光会」との二年以上にわたる協力（継続キャンプと呼んでいた）によって、大火

に見舞われたこの人々を市営住宅に入居させることに成功した。安保闘争のあと六二年には農村問題を取りあげ、「故郷に民主主義を！」というスローガンでもって京都府南部と兵庫県の開拓農村に入り、開拓支援のキャンプが行われている。六三年には、在日朝鮮人問題を取り上げ、東大阪朝鮮第五初級学校のグラウンドを整地。この年の秋からライ回復者宿泊施設「おむすびの家」建設が計画され、翌六四年から建設が開始された。これは日本の労働キャンプが建設するものとしては今までになく大規模なものであり、かつ長期的なものとなった。現在までの五年間に延参加者は五千人を超え、週末、連休、長期休暇のほとんどがこの家の建設に費されている。土地調達、設計、資材購入、建築、そして現在運営へと進む過程のすべてがアマチュアの F I W C 関西の手によって進められてきている。六四年夏の奈良地元の建設反対を契機に、ライ実態調査班の報告にもとずき、ライ回復者社会復帰セミナーセンター「交流の家」として六五年春より再出発し、六七年夏竣工を迎えた。その間、建設工事及びその為の資金調達活動に平行して、全国に新聞発行、全国ライ療養所訪問、中国地方（六五年）、東北北陸地方（六六年）、九州四国地方（六七年）ライ啓蒙キャラバン隊派遣、ライ文学講演会等の活動も行われている。その後もこの家の充実強化の為の管理人住宅建設キャンプがもたれている。（今村忠生氏の略史より引用）

(3) LBFの略史

LBFの労働キャンプ運動は、安保闘争の一九六〇年からディアコニア兄弟会というコルサインのもとに開始された。

売春婦人保護更生施設「いずみ寮」ワークに参加した各団体、主として早稲田奉仕団、東京神学大学、阿佐ヶ谷教会青年会の各有志より結成された。収容者の性格的、知能的ハンディのために社会復帰が予想以上に困難であり、作業場の建設が促されると同時に、男子指導員の必要性、啓蒙、予算獲得を主とするコロニー建設国民運動推進の必要性が叫ばれる中で、ディアコニア兄弟会労働キャンプは、洗濯工場、豚舎、鶏舎、製パン工場、台所、倉庫等の建設を進め、兄弟会中核の職員としての参加と会舎における共同生活が行われた。

六四年になると売春婦人保護長期収容施設「カナタ婦人の村」にキャンプサイトは移り、早稲田奉仕団とディアコニア兄弟会の合同キャンプから、カナタワークキャンプ準備会(kwac)が結成され、六六年このkwacは労働兄弟愛会(LBF)として再発足した。これは労働キャンプ団体としてカナタから独立し、他の施設へも向う運動の拡大をめざしたものであった。

六七年、LBFは立川基地拡張予定地内で、「基地よりも施設を」というスローガンで砂川ワークキャンプを持つに至った。立川基地拡張のために買収し、農民の反対運動で拡張出来ずそのままになっている国有地を開墾し野菜を作り、爆音の下に花文字

花壇PAX(ラテン語で平和という意味)の建設、砂川町基地拡張反対同盟への援農によって基地拡張阻止の意志表示をした。ここで反戦平和活動をする「砂川ワークキャンプ」と奉仕活動をする「LBFワークキャンプ」との二つに組織を細胞分裂させた。そして六七年、砂川ワークキャンプは、拡張予定地内に反戦平和運動の根拠地として「砂川青年の家」を建設し、中心メンバーが共同生活による定住を始め、砂川町基地拡張反対同盟と生活次元で連帯することによって、拡張阻止から基地撤去へと運動をより強化しようとしている。

第三章 思想の流れ

すべての運動が運動であるかぎり、現実を前にして拙速的な答を用意する必要性をもちつつ運動が展開されるわけであるが、労働キャンプ運動は、その創始者ビエール・セレゾールが「言葉よりも行動(Not words but action)」と云っているせうか、理論よりも行動がともかく先行する。「理論は灰色である」(ゲーテ)の如く、認証と論理よりも、行動にこめられた「思い」と「切実感」をなによりも大切にしてきたが故に、書かれた歴史なり運動論は少く、ふりかえってみてはじめて概要をなんとかつかむことができる。

第二章でみてきたように、戦後日本の労働キャンプ運動を概観

すると大きく三期に分けることができる。

※第一期、一九四九年——六〇年

労働キャンプという運動形態は、欧米の平和団体によって戦後日本の復興に寄与する形で導入され、第一次大戦後の世界初の労働キャンプの遺産を受け継いで運動を開始し、引揚者住宅街への奉仕、自然災害の復旧作業、社会福祉施設建設あるいは拡充等の労働を主な内容として、国際間の善意に基く友和と奉仕精神でもって全国各地でその運動を展開した。

「……ワークキャンプ活動は、それぞれの主催団体、またその目的、方法等について相違がありますけれども、戦争、貧困、疾病、無知と云うような人類共通の敵と闘い、勤労の汗と、苦楽を共にする団体生活を通じて、地上に平和と親善の関係を推し進めようとする根本の精神において、深く相通するものがあり、またこの点においてユネスコと理想を一にしている活動であります。このようなワークキャンプ活動が国際的な連繋の下に、次第に世界的な協力体制を確立する方向に成長しつつあることは、今世紀における人類文化の進歩の一大特徴とも考えられることであると思われます。……」(日本ユネスコ国内委員会事務局編『ワークキャンプハンドブック』より)

「……私が始めてキャンプに参加した時には昔の「勤労奉仕」にでも行く様なつもりだったのですが、それは全く異なったものでした。仕事それ自体が目的ではない。仕事も単なる慈善事業では

ない。とこんな事を感じました。その日一日が非常に愉快なもので二〇人ばかりのキャンパーの殆んど全部と初対面であったのですが、泥にまみれシャベルを振ったりしている中に忽ち十年も前から友達のように話し合ったり冗談を云ったり議論をしたりフォークダンスをしたりすることが出来るようになりました。土方工事が私達のあらゆる様を引きはがして一個の人間に還元してくれたのです。裸の人間と人間とのぶつかり合う所に友情が生れます。その日からキャンプにすっかり夢中になって暇をつくってはキャンプに参加し、その都度心温る気持を抱いて家路につくことが出来たのです。私達学生はとにかく人生だ、理想だ、平和だと机をたたいて議論はしても唯それだけに終ることが多いのですがキャンプでは現実に足を下して皆一緒に働きながら問題を見つめて行く事が出来ます。土方仕事、大工仕事、ペンキ塗り、炊事当番等々に、皆が一緒になってやってみるという理屈ぬきの実行、綿のように疲れたときの喜び、キャンプを通じて新しい友達の間で得られるということ、国籍、人種、職業、利害関係その他異った背景を越えて共に働くその交わり、その喜びは世界平和の可能性を示していると思えます。」(同)

これらの言葉はこの期の思想を典型的に表現していると思われる。労働奉仕、自己教育、友情を三大支柱とするキャンプビューマニズムに対する讃歌は、戦後民主主義と共にわき起ったサークル運動と共通するものである。英語を使用する国際キャンプの国

際親善の一端をになつてゐるという自負、自らの労働の成果に対する満足、それらのものは、民主主義意識がまた憲法や平和といった戦後意識の契機が意識形態にまで熟さなかつたと同様な形で終りをとげる。すなわち、労働キャンプに於ては、五五年以降、精薄児福祉、婦人保護、身障者福祉等が問題になるようになり、施設開設などの専門的な領域での仕事の結実を始め、それに対する資金、労働、職員等の面で協力体制ができるようになると、日本の福祉行政の物心両面に於る貧困に直面し、質的変化をとげるようになる。日本は戦後の復興を一応終え、急激なる経済成長でもって独占資本主義体制の確立に至るが、本質的には所得の缺状格差に見られる如く、貧困の部分を見視あるいは抑圧することによつて発展したその歴史を、労働キャンプは他ならぬ労働の現場において見るようになってくる。

「ワークキャンプは日本の暗黒に等しい部分に接点を設けて、忘れ去られようとしているその状況にぶつかり、それを自分の内部に九ごと飲み込みながら自分の傷に実感を通して日本の現在の意味に現代史を探ろうとする集団です。それ故に僕は八繁栄の中の類腐」といわれてゐる現在の日本の姿を、この微視点部分と接することによつて逆にトータルな像として捉えることが出来るようになりました。

ワークキャンプの歴史を顧りみると、国家機構が置き去りにしてきた重大な社会問題を取り上げ、何故に置き去りにされてい

たかという原因を、その問題の当事者との衝突、交流を通して深く掘り下げ、労働力を使いながら、その問題の正当性を証明し続けてきたという事実を見ると同時に、一貫して擬民主主義と鼻を突き合せてきたという事実を見ることが出来るようです。」(『IWC 関西』シャベール』復刊第二号湯浅進)

※第二期、一九六〇年——六七年

労働キャンプ運動がキリスト教関係団体の部分的輸入的活動から脱皮し自立的な運動を展開する時期がこれに該当する。

時代背景として一九五九—六〇年の安保闘争があり、これがこの期の労働キャンプ運動に多大な影響を与えることになる。この闘争に参加したキャンパーあるいは学生運動の仲間を含めて、政治あるいは政治運動組織への反省から、日本の自発集団の発掘に向いつつ、また自らの集団の持つ内在的価値にめざめるようになる。労働キャンプが一定の綱領なり規約を持つことなく行動する集団であることの意味が改めて問題として登場し、クエーカーの「信教の自由」を現代的に「思想の自由」の意義に受け継ぐべく、集団を組みかえていこうとした。それは、第一期にみられるが如き労働キャンプ集団の理論を「小集団の理論」に求め、一つ一つのキャンプを擬似共同生活の場として完成度の高いものを第一義的に考へるのでなく、全ゆる種類のボランティアを無制限にキャンプに受け入れる。つまり全ゆる思想と全ゆる参加の仕方を認める集団論であり、またそれによつて量的にも多くの人間による「

平和の軍隊」(ビエール・セレゾール)たる社会運動を目指す方向さえてくるようになる。また、ちりちりになっていった学生運動の仲間と、労働キャンプが対象としてきた社会の底辺の人々との連帯と社会変革のための「根拠地」を形成しようとする動きは、日本土着の共同体の研究(主として山岸会など)へと導き、毛沢東の井岡山の革命根拠地の研究へと向い、ディアコニア兄弟会においては会舎共同生活の中でそれを温め続け、「いずみ寮」「カナタ婦人の村」にそれを作ろうとしつつキャンプを試み始める。結果としては、その経営主体である「ベテスタ奉仕女母の家」との対話、統一の不成立をみたが、ディアコニア兄弟会は「底辺キャンプ」と名付けた一連の学習活動とアプローチを続けるなかで、LBF(Lazarus Brothers Fellowship)(労働兄弟愛舎)として独立した労働キャンプ運動を推め、そして砂川町基地拡張反対同盟と連帯するなかで、砂川の土地に反戦運動の根拠地「砂川青年の家」を建設する。

「カナタ婦人の村」の殉教の姿勢の中に、従来の戦闘性の欠除を見るが故に、婦人の村コロニーとして、拡大よりも持続の方針を打ち出しているが故に、私達兄弟会残党は、LBF、砂川を中心とする新しい仲間の集団と共に、ディアコニアの系譜を受けつぎ、新しい根拠地形成の場を、反戦反体制の根拠地を砂川に創設せんとしている。しかし、その中でディアコニアの理念を如何に生かし切るかが問題である。砂川ワークキャンプの契機となった日本

山妙法寺集団との対話は、一九七〇年の安保再改定を目標として八人間の意識と行動のあり方Vを更に意欲的に追求することになるだろう。」(『ディアコニア兄弟会運動の展開』)

一方、FIWC関西は、寛容的日本古神道大倭教の協力を得て、共同体「紫陽花邑」の土地の一部を借りうけ、社会運動のための根拠地「おむすびの家」の建設にとりかかる。

SOIは、新島(ミサイル闘争)キャンプを経て、日本最高の高冷地農業から酪農にきりかえた金峰山開拓牧場の開設を支援しながら、そこに平和運動の根拠地「SOIアジア地域トレーニングセンター」を建設した。

そしてこの期には、労働キャンプとして入った現場は、まさに高度に発達した産業をもつ社会からおき去られた、あるいはそのために抑圧された部分であるという視点が確立するようになる。

「精神障害者の置かれている状況は、約十一万人の入院患者数のうち、九割以上の治療を担当している私立病院の営利本位の経営方針と、世の中の無知のために、その家族、職員共々に劣悪な様相を呈していた。そして彼らの完全治癒と社会復帰を資本主義社会の壁が大きく拒んでいるのである。」(LBF『ワークキャンプ運動第三期の課題』)

「——我々がこの独占資本主義社会にあって疎外された存在であるとするならば、それらの人々は、二重三重に疎外された存在であると云えるであろう。我々がこれまでに行って来た運動は、

その疎外の皮膜を何枚かとりつけるということではなかったであろう。しかも我々は、小市民的な「疎外」の衣で我々自身をしつかりと防衛していたのである。」(F I W C 関西機関誌『しゃべる』復刊第一号)

またそのような部分への具体的協力を通して、現在の課題とは何かという認識に至る。例えば、「在日朝鮮人」「部落」「らい」へのアプローチは自分達自身の潜在意識に深く入り込んだ差別と偏見がいかに支配の歯車として役立っているかについて、確認し、「希望の家」「優身の会の家」など施設建設では、政府の福祉政策がようやく身障児童に関心を向けてきたが、身障成人への施策をあとまわしにしているという事実の発見をする。こうして現場としての小状況と体制としての大状況との関連を、現実的な運動論の中で模索するようになる。

そして、地域共同体という現場へ入る形態から脱け出し、独自でキャンプサイトを設定し労働をもった「交流の家」建設キャンプに移ってくると、キャンプサイトとして選んだ集団のもつ生活に密着した価値を掘りおこし触発することに第一義的な意味を見出すというものから、労働キャンプがもつ運動体としての内在的価値を追求し、計画の長期化膨大化日常化によって、一つのつくられた集団として生活の次元から運動集団としてとらえなおそうという傾向が圧倒的になる。

※第三期、一九六七年——

「導入」「自立」に続く第三期は、L B F の「砂川青年の家」、F I W C 関西の「交流の家」、S O I の「金峰牧場」の創設をみることによって、「根拠地建設」の時期であると云える。時代背景として、再び七〇年安保に対する政治運動あるいは市民運動の昂揚があり、世界的な学園闘争の拡がりのなかで既成運動組織を乗り越えたところに新しい運動集団が次々と誕生していった時期である。

各々の労働キャンプ集団が自らの運動の視点に拠るところの運動基地を作り、それを充実強化する方向と、その中で芽生え、育てられ、確認された思想がお互に繋ることによってより運動的に鍛えていこうとする方向である。

「——ハンディキャンプを負った、社会の競争に耐え切れぬ者達への労働による奉仕と、差別偏見に閉ざされた人々の解放の運動が、ある段階にまで拡大発展した時、自己権力化を警戒しつつも自らの根拠地を弱きを覚える者同志で連帯し、打ちかためていく発想が起ったことは当然である。(中略)現代社会にあつて、権力者の判断、あるいは、体制順応モラリストの判断によって異端視された人々の復権と、反撃を、いずこの地点かで為さねばならない。そのための物心両面にわたるエネルギーの供給源であり、志を通じあい、その地点自体が、お互の存在を認めあい支えあう具体的な場を、我々は根拠地と呼ぶ。」(L B F 『ワークキャンプ運動第三期の課題』)

いわば「近代主義的」な運動から、「マルクス主義的」なそれへと移行し、第三期に至ると「土着的」なものとなり、自らを、いわゆる反体制運動のように一直線的に権力と対峙する戦闘的な運動として設定せず、思想として温めつつけてきたユートビズムなり共同体への志向を、反権力の視点のなかで、運動として「根拠地」の理念を構築し、その創設のなかで社会運動を考えようとしている。それは、非常にゆるやかで、かつ不定形なまま行動するサークルとしての労働キャンプが、「隣人の生命を支え蘇生させる」福祉の理念から、「生命を無視、破壊におとし入れる」戦争の体系に対決するに至った回帰の過程と云えるだろう。

第四章 反政治としての肉体労働

労働キャンプ運動は、参加者の主義・主張、信仰・信条、社会階層、人種、国籍、年令、性別等々を一切問わず、ただ「よりよき社会実現のために」という一点において集団を組むため、あらゆる思想が雑居し、ただ肉体労働のみを共通の基盤として運動が展開していく。この肉体労働による成果は、これまでみてきたように多くの場合、行政の貧困からくる部分、見落した部分と呼ばれる、例えば精薄、身障、らい、スラム等の施設、制度のたちおくれ、あるいは欠除を補うものとしてあったが故に体制への合作の歴史であったと云える。労働力を提供して作り出されるモノが、

行政の補完的役割にしかなり得ないものであるならば、「よりよき社会の建設」は単に改良主義的な色彩を漂わせるに留ってしまふ。多くの労働キャンプは、そのまま体制にベッタリ組込まれていった（教育委員会等の支援する労働キャンプは無数にある）なかで、平和主義をかかげる労働キャンプは、いかにしてどこにいわゆる反体制あるいは反権力的志向を持ち続け、表現してきたのであろうか。

「ワークキャンプは、日本の暗黒に等しい部分に接点を設けて、忘れ去られようとしている状況にぶつかり、それを自分の内部に丸ごと飲み込みながら自分の傷々実感を通して日本の現在の意味現代史を探ろうとする集団」（FIWC関西『しゃべる』復刊第二号 湯浅進）

一般的には、本来行政がやるべきである、という意味での社会的矛盾の凝集点と思われるような現場に向っていたわけであるが、その現場は実は、多数者による少数者の疎外現場である、という認識を生む。すなわち支配被支配の顕在化した場であるという認識によって階級的視点を持つ。そこで政治の論理が登場してくるが、現場での共労の実感とはびたびたそれを裏切る。政治とは、個々バラバラでは存在しえないという人間の共同性（類的存在）が、現実過程においては敵対（本質的には生産と所有の対立）の故に、「対立の一定の疎外された止揚として幻想過程に疎外されたもの」（FIWC関西発行『ライ園工作隊報告書』）であり、その意味

で政治の対象は全体であるのだけれど、逆にそれが現実でなく幻想であるが故に現実社会の個別的な生活を含み得ない。だから、全体の名のもとに個的なエゴイズム思想が規制されざるを得ず、これに固執する現場から全体を見るならば、政治は、政治であるかぎり決して全体を扱い得ない、という本質をみることが出来る。個的なエゴイズム思想に執着するということは、それが総じて私的なものであるが故に、総体として量的なものではなく質的な部分の追求となる。だから「行政からおちこぼれた部分」とか「忘れ去られようとしている部分」という言葉は、実は「行政の怠惰で落された」とか「行政が本来やるべきなのにやらない」ものではなくして、政治の論理では扱い得ない、落してあたりまえのものである。政治とは、という問いから生まれてくるものは、とどのつまり、社会を多数者のためという量単位を幻想として扱うものであり、労働キャンプが扱ってきた問題は、行政的解決などあり得ないという視点を持たせることが出来る。これまでみてきたように、現実的には機能において、行政の補完的役割を担う改良主義の色彩をもつが、一つ一つ改良していけば体制変革に至るといふ構造改革論でもなく、また現体制に対して新しい権力体制を対置しようとするいわゆる反体制運動でもなく、すこぶる反政治的方法をとる。体制にステップをおきつつ、内実はその体制のルールを越えようとする自らのルールの場を確立しようとするが故に反体制にもステップを置いていると云えるのであるが、そ

れはイデオロギーとしてではなく、現実の社会的弱者と呼ばれる人々との共同の生活の論理を組む方向として、労働キャンプ独自の土着的方法である。従って、政治の論理を廃し、人間を量としてみる一切のものを拒否する運動として、自己が接した部分ととり込み眺めつづける中から全体をとらえようとする。

具体的な事例をあげると、FIWC金沢委員会で次のような問題が起った。精神薄弱者終身愛護施設の建設を手伝おうとした際、自衛隊がその機動力で建設に参加したいという申し入れがあった。自衛隊などは本来存在すべきものではないし、そういう施設建設は市民運動としてなされるべきであり、軍隊としての自衛隊が入ってやる施設建設には反対である、という意見を施設経営主体に提出し、結局FIWC金沢はそのまま整地作業に参加せずに終ってしまった。その翌年のFIWC全国代表者会議は次のような総括と反省をしている。

「自衛隊という総体を見るのではなく、個々の隊員を一個の人格として眺めるという視点が大切なのであって、その視点がなければ、自衛隊を平和の部隊として自分達の側に組み変えることは出来ない。私と一隊員との関係の発生だ。金沢の問題はそこから考えることが出来る。だから自衛隊と共に整地作業することには意味があるのだということは忘れることは出来ない。ただ向かつて自衛隊の存在、あるいは、自衛隊によって作業がなされる事に対する反対の意思そのものまでも売り渡すべきでない。百のうち九

十九まで自衛隊がやったとしても、残りの一を私達ワークキャンプがやったという抵抗の表現も意味をもってくる。そういう表現の仕方が、私達だけがとり得る表現の仕方ではないだろうか。ポランティア運動とは、「私がやる」という運動であり、従って私とをなした関係が基底であることに意味をもってくる。(F I W C 関西発行『一九六七年 F I W C 全国代表者会議報告書』より)

既成の運動組織に対するアンチテーゼがみられるが、自発性あるいは関係性というものを運動の基底と出発点とする限り、それらのものを保証するところの集団論は不可欠である。つまり、体制のルール(政治の論理)から独立した、量の論理を越えたところの自立集団を形成していくことが大きな要素として考えられなければならない。運動を持続するエネルギーの根源をエゴイズムすなわち自発性に求めるやり方は、それ故に量の論理を採り得ず、現場の生活者のエゴイズムと共通し、そのエゴの衝突を通してのみ関係が発生し、この関係が運動のダイナミズムを生む。このエゴイズムこそが思想における現実であり、組織とは多数者によって少数者の自発性を抑圧するものに他ならず、それは即政治の論理である。これに對置するものとして、労働を中心とする労働キャンプ運動の集団論が登場する。

その肉体労働は、政治の幻想にふりまわされない部分に接点を求めてきたが故に、まず、安易に行政的解決に向うことなく、人間を量として扱う一切のものを拒否する視点として、労働キャン

プ運動を支えてきたのであるだろうし、第二に、肉体労働の即時的にとり組む対象が「物」であり、それに各自がそれぞれの思想を込めるといふ関係が成立する故に、イデオロギーの一致がなくとも一致する可能性を提供する。従って第三に、生産こそが出発点であり根源であるところの肉体労働は、思想的内実を言葉としてでなく、「物」として表現し、自らのルールの場を「物」として建設し得る。これまでみてきたようなキャンプ運動の、第一期、第二期、第三期という移行は、本来の労働それ自体がもつ創造の欲求でもある。第四に、それは身銭を切って参加する無償の労働であるから、労働力商品としての賃労働とは全く異なるが故に、資本主義体制下においては、自らの生命を維持することは出来ないが、だからといってその無報酬の行為が無意味なものではなく、商品価値としての経済体系が逆立しているからであり、志向としてはあるべき未来の労働と生活を取り上げるとも云える。

善い政府であれ悪い政府であれ、いかなる政府が存在しようとも、それからもれた根底的部分をみつめ、そこに接点をあてた肉体労働があつたからこそ、ポランティア運動としての労働キャンプは、体制内奉仕活動から脱却し、反政治的自発運動集団として甦らせることが出来る。

第五章 合作の思想

前章でみたように、行政の補完的役割を機能的に果すが故に体制へステップをおいているわけで、その機能とは単なる行政的機能ではなく、つまり例えば、国家保障としての社会福祉ではなく、相互扶助としての社会福祉として、その内容をうめていくものであり、従って内実の豊富さがその部分的に行政と協力関係に立ちながらも、なおかつ体制批判の可能性をもつ。それは、例えば予算難などの名目によって見捨てられた社会福祉施設を、自らの肉体労働で建設あるいは改修する中で、社会福祉の本来的なあり方を、施設あるいは行政の関係者と協力しながら提示しつつ自らのルールのもととして確立することになる。このことは、「たてまゝ」として偽装したものと「ほんね」の両方を巧みに使いわけるということではなく、実質的に内実の豊富さがこのような性格をもった表現の豊富さを獲得しうるのであって、表現そのものは体制的とも反体制的とも受けとめられ、従って何人にも必要性を認められる可能性をもっているが、全面的に信用されるわけでもない。あるものは肉体労働による実績のみである。

あるときは、体制と合作し（例、交流の家）、あるときは反体制と合作（例、砂川青年の家）することによって、より密度の高い仕事をめざしながら、それをチェックする役割をもつ。それ故に政治が政治として存在する限り、不断に落ちこぼれる部分が存在するから、その根底部分に焦点をあてることによって、常にその時その時の体制の補完的役割を担うことになる。その意味では、

状況運動と異なり抵抗の側面よりも、動かざる部分を原点とするところの創造運動として位置づけることが出来る。

労働キャンプ運動がこうして生み落してきたもの（例えば、SCIの「金峰牧場」、LBFFの「砂川青年の家」、FIWC関西の「交流の家」等）が今後どのような動きをするか未知数である。

一九六八年十月